
代わりの探偵団

月人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

代わりの探偵団

【Nコード】

N6796Q

【作者名】

月人

【あらすじ】

主人公、黒神龍斗は、黒神探偵事務所の一人息子で、父が旅行から帰ってくるのを待っていた。そんな時に依頼人がやってきて、しかもその依頼が『バラバラ殺人事件』の犯人を捕まえることで…
龍斗と仲間たちの協力と、龍斗の知恵を武器に犯人を追いついていく、

推理がメインな、いつもどおり異常な日常を描いた物語

第1話 黒神探偵団結成（前書き）

初めての投稿で上手くかけなかったのですが、よかったら読んでください。

不定期投稿になると思いますが、よろしくお願いします。

第1話 黒神探偵団結成

『続いてのニュースです。本日S県でバラバラにされた死体の身元が判明しました』

『被害者は持ち物から大村 おおむら 理恵さん りえ だということが判明しました』

『大村 理恵さんは私立森之宮高校の生徒で、部活動が終わり、

帰宅中のところ

襲われた模様です』

『また、先日の2件と同じように右肩から先のみ現場から無くなっている事から

同一犯の可能性が高いとされています』

『これで森之宮高校の3人目の犠牲者となってしまうました』

『今のところ犯人の手がかりは無く、警察の捜査はほぼ前進していないようです』

『いらつしやいませ』 完全な営業スマイルで出迎える

『あのー、黒神探偵事務所 くろかみ というのは、ここであつてますか？』

小柄な若そうな女性がおどおどしながら入ってくる。

まったく嫌になる。なんで親父 おやじ がいなときに限って依頼人 ひと が来るのか

『あのー』

不安げにたずねてくる。

『え？ああ、そうですよ。黒神探偵事務所によっこそ』

まだ不安そうな表情かおをしている。わかつてはいるが一応聞いておく。
「どうかしめたか？」

「その、えっと、探偵さんは40歳ぐらいと聞いていたのですが…」
「やっぱり。これで9人連続で同じことを言ったことになる。」

「それは僕の父のことですね。父は今仕事でイギリスに行っていていまして…」

「えっと、じゃあ依頼は無理ですかね…」

父がいないと知ると、悲しむか怒るか以外の反応をされたことが無い
「もし、よろしければ僕がその依頼を受けましょうか？」

「えっ あ、いや その…」はつきりしない人だ。

「申し遅れました、僕は黒神くろがみ 龍斗りゅうとといいます」

「その、えっと」 もう一押し。

「よろしく願います」

「あ、願います」 完璧だ。

「で、その『依頼』というのは？」

どうせ、犬や猫を探せとか、落し物を探してとかそんなものだろう。
その程度ならもう何度も成功させている。

「『バラバラ殺人』の犯人捜しです」

「は？バラバラ殺人？なにを言ってるんだ？」

「なんの冗談ですか？」 からかいなら帰って欲しい

「冗談なんかありません」

女性の表情は、真剣そのものだ

「娘が、殺されたんです。願います」 それからある程度の事情を聞いた。

自分では難しそうだが、大丈夫だ。

明後日には親父も帰ってくるはずだ。

「わかりました。その依頼、黒神探偵事務所にお任せください」

…依頼はおかしいが まあ、いつもどおりだ。
なんとかなるだろう、親父さえいれば。

時計を見ると、もう11時だ。

「もう遅いですし、今日はお帰りください。また、都合のいいときにお越しください」

「あ…えっと、そうね、そうさせてもらうわ」

いろいろ喋って疲れたのか、すこしフラフラしている。

「送りましょうか？」めんどくさいが、一応聞いておく。

「え、いや結構よ」そう答え事務所を出て行った。

明日は学校もある。もう寝よう

朝にでも親父に連絡するか……

「ふざっけんな、この糞親父！！依頼が来たんだよ！」

朝早くから、なんで大声ださなきゃいけないんだ。

「あゝ悪いな。こっちでも色々あってな、帰れそうにねえんだ」

一切悪いと思ってない声で言う。腹立つ。

「何度も言うが、依頼だ、しかもバラバラ殺人の犯人捜しだ。帰っ

て来い」

「何度も聞いたが、無理だ、こっちも忙しいんだ。あきらめろ」

言い方を真似られるのが、ここまで腹立つとは思わなかった。

《ガチャッ》

勢いで電話を切ってしまった。やばい。

急いでもう一度かけなおす。

「ただいま電話に出ることが《ガチャッ》

やられた。こうなったらもう連絡がとれない。

どうしようか…あの依頼断るしかないのか…

とりあえず、森之宮高校に行かなければ……あいつらが待っている

あいつらに、この『依頼』についていうべきか……

「おつせえ。マジ遅え。あいつ来たらまず殴る」

「まあまあ。止めときなつて」

「悪い遅れた。」といつても1分20秒だが

「おい、龍斗。てめえこの俺様を待たせるたあいい度胸だ。1発殴らゴフッ

「止めなつていったよね？」鋭い拳が男の腹を抉る。

殴られた男が白井しらい 健也けんや 喧嘩屋でかなり喧嘩は強い。

殴った女が雲井くもい 舞元まい 族長で、白井より強い。

どっちも中学からの付き合いだ

こいつらといると退屈しない。

「雲井は相変わらずだなあ」素直にそう思った。

「暴力的じゃなけりやいい女なのにな……」

「……………」みしい

白井の腹が再び抉られる。

倒れた白井を置いて学校へ急いだ。

「あゝ。おはよう？。今日はちょっと遅かったね？」

いつものように加藤千鶴かとう ちずるが疑問系で声をかけてくる。

加藤はこの学校の情報屋みたいなことをしている。基本語尾は？が付く。

「そついえば？あれ、やっぱり大村さんだったね？捜査進まないんだつてね？」

「あー、そうみたいだよ。ウチも今朝ニュースで見た」

「警察も？なんか、あんなりに手がかりが無さ過ぎるの？時効前の事件があつて大変みたいだよ？」

「へー、知らなかったな。というか、どこからそつという情報持ってくるの？」

「内緒？」

「ところで、他にどんなこと知ってんの」

「社会的なことから……恋バナとか？」

その後もわいわいやっている。

完全に空気扱いな俺。席はすぐ隣なのに。

普段は健也がいるから暇じゃないけど、今日はいない。

あつという間に8時40分になり、ホームルームが始まった。

「おい、お前ら席に着けー」担任の鬼頭おにかしらが教室に入ってくる。

「お前らは知ってるだろうけど、大村はやっぱり殺されていたそう
だ」

教室内は一瞬静まったが、すぐに、いつもどおりになった。

みんな慣れているんだ。

今の世の中じゃ 自殺も殺人事件もよくあることになっている。

誰が死んでも「そうなんだ」で終わる。

正直、気味が悪い。死ぬことが当たり前みたいな考えは嫌いだ。

長々と鬼頭が話していると、勢い良くドアが開いた。

「すいません、遅れましたー」 健也が入ってくる。

鬼頭に睨まれながら俺の前の席に着く。

「お前らのせいで遅れたじゃねーか」小声で言う。

「「知るか」俺と雲井の声が重なる。

そして、授業が始まった。

昼休み

天気がいい日は大抵、屋上で昼食を食べる。

俺が屋上に着いた時には、もう健也と加藤は屋上にいた。

「あれ、他の二人は？」

「まだみたいだね？」

「おまたせー」「すいません、待たせてしまいましたね」

雲井と東海林先輩がきた。

東海林 騎士先輩はこの学校の生徒会長で勉強もかなりできる。あと、みんなに敬語。

普段からこのメンバーで飯を食べたり、遊んだりする。

「腹減った。もう食おうぜ」健也が言ったので、飯にした。

『依頼』のことを言うかどうか、まだ迷っていた。…もうあんな目にあわせるわけにはいかない。

言わないことを決めたとたんに、

「龍斗、お前、なんか言いたいことあるだろ」健也が言う。

驚いた。本当に驚いた。

お前のことは何でもわかるぜ、みたいな顔をしている。《ボカツ》

そんな健也の頭を雲井が思いつきり殴った。

「なんで、黒神が言うのを待てねえんだよ」

「そうですよ。待つてられないんですか？」

「本当にね？空気読もうか？」

………何？

みんな俺が何か言いたいことはわかってたのか？

「さて、で、何が言いたいんだ？」頭をさすりながら健也が言う。

言いたいことがあるとばれているのか、ごまかしきれないな。

「『依頼』が、きた」それから俺は、『依頼』についてすべてを伝えた。

明日詳しいことを聞くつもりということも。

協力して欲しいということも。

「……………これが言いたかったことだ。が、強制したいわけじゃない……」

「もちろんオーケーだぜ」

「ウチもいいよ、全然大丈夫！」健也と雲井がすぐに了承してくれる。

加藤と東海林は、少し悩んでいたが、受けてくれる。

「なあ、これで5人になったからよ、『探偵団』って名乗っていいのか？」健也がそんなことを言う。

4年前の約束をまだ覚えていたのか、と呆れる。

「そうだな。いいことにするよ」

見てるこつちが恥ずかしくなるくらいに大喜びする健也。

東海林先輩に下の名前で呼びますから、呼んでください。と言われた。

健也が浮かれながら、探偵団なんだから、団長を決めよう、みたいなことをいい、

俺以外は全員俺を指名した。俺が団長ということ、『黒神探偵団』が名前になった。

「よろしく？団長さん？」

「よろしくお願いしますね」

「頼むぜ、団長！」

「頼りにしてるよ、ウチもがんばるからさ」

かなり恥ずかしいが、悪い気はしない。

最後に、絶対に言わなきゃいけないことを言った。

「協力は嬉しいし、頼りにもしている。けど、無茶だけはしないでくれ」

えーとか 嫌ですとか 嫌だ？とか 拒否だとか聞こえたが、

団長命令だといえば、従ってくれた。

昼休みが終わるまえに解散した。と言っても4人は同じクラスなのだが。

とりあえず、『黒神探偵団』ここに結成。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6796q/>

代わりの探偵団

2011年10月8日17時54分発行